

「今、私の晴雨計は！③〇」

「北スペインの街で！」

平山征夫

四月中旬から一〇日あまりドイツとスペインに行ってきた。高校卒業と同時にオランダの音楽院に留学し、卒業後オランダのオーケストラでヴァイオリニストとして活動してきた次女が、今夏カナダ人の夫の日本企業への就職を機に子供（私にとっては孫）を連れて日本に帰国することになった。それでドイツでピアノストと音楽大の講師をしている長女を含めて帰国記念家族旅行をしようということになり、イースターの休日のこの時期に出かけたのだ。

成田を昼前に出発した飛行機

は十一時間余りのフライトを経て、時差七時間のドイツ・デュセルドルフ空港に夕方四時過ぎに到着したが、帰りと異なり寝る必要のない往きのこの時間の殆どを私は映画鑑賞で過ごした。お蔭でアカデミー賞ノミネート作品「ラ・ラ・ランド」「ムーンライト」「フェンス」など纏めて見ることが出来た。その時見た映画の話は、この旅行記の最後にしよう。まず、訪れたのが長女の住んでいるドイツ中央から少し北西に位置する人口七万人余の小さな街デトモルトだ。長女が芸大卒業後留学しそのまま講師で在籍している音楽大学がある街だ。長年一人住まいのおばあさんの家にな

宿していたが亡くなられたので、

街の中心にアパートを借りて移転したので見に行った。一人では広すぎるのに日本よりはるかに安い部屋代に驚きながらその娘の部屋に二泊した。短い滞在だったがデュッセルドルフとの往復の列車や、すぐ近くのマルクト広場でのマーケットや、奇岩の観光地エクステルンシュタイネの建物などを通じてドイツの現状課題についても気づかされた。それは、数年前に比べこんな田舎町でも移民が目立つようになり、ゴミ出しなどの地域社会のルールを守らないため人々の不満が増大していることだ。ナチスの歴史的負の遺産を背負うドイツでは、移民受け入れは国としての贖罪の

ようになっていくが、それでも本年九月の総選挙でメルケルの政

権維持にどう影響をするか予断を許さないと言われているのが何となくわかった。もう一つ「えー」と思ったのが娘から聞いた「自分が教えている音楽大学の優秀学生の殆どはドイツ人ではない」という事だった。もともと余り器用でないドイツ人だが、四〜五歳から始めてコツコツ積み上げてゆかなければならない。ピアノスト養成なのに、子どもの進路をそんなに早く決めないドイツ流では、幼少から始めるアジア人やロシア人等には敵わないのだ。ベートーヴェンはじめ沢山の音楽家を生んできたドイツも今や必ずしもクラシック

大国ではなくなり出してきているのだ。

デュッセルドルフでオランダのマーストリヒトから車で合流した次女と孫も加わって、我が家総勢五人は北スペインのビルバオに空路向った。この地域を選んだ最大の理由は、気候が温暖でノンビリ過ごすのに向いていることと併せて重要な旅の要素である食事が美味しいことだった。世界有数の美食の地域であるバスク地方の中心都市のビルバオとサンセバスチャンで部屋を借りてゆったり過ごそうと考えたのだ。美食の代表メニューはピンチヨスだ。フランスパンなどの上にタラやメルルーサ、アンチョビ、エビ、ウニなどの海の幸はじめハ

ム、サラダや卵料理などあらゆる食材から各店が独自の工夫のものを乗せた料理だ。これをピンデ留めていたのでこの名があるのだが、バーで立ち飲みする際のみみと食事を兼ねた料理だ。好みのピンチヨスを肴におしゃべりをし、はしごをしている風景は平和な観光地そのものだ。生活をエンジョイすることを最優先するラテン民族の生き方を表した食べ方飲み方だと思った。ピンチヨスをつまみながらチャコリという白ワインやシードラというりんごジュースを発酵させたものを飲むのだ。豊富な魚貝類やイベリコ子豚などの食材もあり、超有名な高級レストランも沢山あるが、懐具合と孫連れという事もあ

り専らピンチヨスの食べ比べで過ごした。ピンチヨスにいささか飽きて飛び込んだお寿司屋では、インド人が握っていたが、ネタも良く結構おいしかった。

同じこの時、木々は日本より早いペースで新緑になっている。何より違うのは日の入りがもう夜九時と日本に比べかなり遅いことだ。だからこの人々は爽やかな春の宵を楽しんでいるのではなく、早い夏を謳歌している雰囲気だ。風が少し冷たかった日には、昼間砂浜には散歩する人しかいなかったのが、気温が二〇度を超えた途端水着を着た人で一杯となったのには驚いた。それも海水浴というより日光浴だから。砂浜は人で一杯なのに海の中には人

はあまりいない。だから日本で夏の夜長夕涼みで楽しむように日の沈むまで街は買い物客で賑わうし、まだ明るい夜七時くらいからバーで飲みだした人々は、九時頃には海岸に集まってサンセットショーを見る。それで長い一日がようやく暮れる。

私の知り合いで「リタイアしたら物価も安い北スペインで年金生活を送る積りだ」と言っていた奴がいたが分かる気がした。美しい自然に快適な都市空間をマッチさせることが、いかに豊かな人間的な生活を送るのに大切な条件かつくづく感じさせられた北スペインの街での休暇だった。

(平成二十九年五月十六日)